

地歌『長等の春』の歌詞から

ナガラ

——その古事来歴を尋ねて——

宮 川 武 治

竹号 恭 園

一、まえがき

竹歴が六十七年にもなると、習得した尺八曲は二百曲を超えている。だからといって、私の尺八は趣味の域を出るものではないが、曲名や歌詞から情感を汲みとって、曲趣を表現し高める様に吹奏することを心掛けています。

地歌「長等の春」^{註1}は、私の好きな古曲（江戸期の作品をいう）の一つで、放送や各地の演奏会でもよく聞くことが出来るし、私は今までに四回程演奏している。この歌詞は、古くからよく知られた滋賀県大津市の長等山を舞台に、桜散る晩春の情景を詠んだもので、曲調は爽やかで、情感に溢れた演奏時間が十二分程の小作品である。次は、この「長等の春」の歌詞であるが、オリジナルの歌詞を求めて、京都府立総合資料館に行き、所蔵されている貴重本、

明治三年刊行の『新うたのはやし』^{註2}に編まれているものを引用し、固有名詞や名詞には（ ）内に漢字を当てた。本稿は、この歌詞の側線を付した事項について、その歴史や由緒を興の赴くままに記述したものである。

ながら（長等）の春

手事
三下り

湖南

雅無舎述

菊岡検校
八重崎検校

調

にぎをふやはる（春）の朝たつかすみ（霞）はれしが（志賀）のみやこ（都）はあれにしをながら（長等）の山のやまざくら（山桜）むかし（昔）を今ぞおもふなる花のさかりもいちやうによも（四方）のながめもつきせじとたかくわんおん（高観音）の庭桜むかふはるかにみかみ（三上）山へたつるには（鳩）のうみ（海）のおも（面）そのうらく（浦々）も見えわたるゆきかふ船のかち（楫）おともかぜ（風）のたより

にきこゆなるあそひたはむれ春のくれ(暮)なごりををしむもろ(諸)人のいりあひ(人相)つくる三井てら(寺)のかね(鐘)のこゑ(声)さへ吹かへすかぜ(風)につれたち散るさくら(桜)さくら(桜)々々)におくられてうとふてかへるさくら(桜)人々

〔註1〕 地歌とは、江戸期に三味線楽器の誕生とともに起った三味線歌曲をいう。地歌の用字について、上方が地歌、江戸が地唄と書いた歴史的な背景がある。現在は混用されているが、本稿は「長等の春」が上方の作品であり地歌とした。

〔註2〕 『新うたのはやし』は、明治三年、地歌作詞家の橋萬九が、地歌一七二曲の歌詞を、いろは順に分類収録し、A4版の薄い和紙(全七十五枚)に、極めて読み難い草書体で版刷りし、これを背折りしてA5版に帖綴したものである。私の西園流尺八楽譜には、この内の四十三曲が採曲されているが、この他の殆どの曲は現代の邦楽界でも演奏する人がなく、消滅していると思われる。

二、地歌「長等の春」の作詞者と作曲者のこと

「長等の春」の歌詞譜に表記されている雅無舎述とは作詞者のことで、この雅無舎は江戸後期の湖南(琵琶湖南地域)の人である。『新うたのはやし』には、雅無舎の作詞曲が、「千代の友」「朝づまふね」「四季近江八景」の合わせて四曲収録されている。この世界では重きをなしていた人ではないか。また、この歌詞に詠まれている志賀の都は、万葉

集をはじめ古の歌に見ることが出来るが、昭和期の学術発掘調査で、その存在したことが確定するまでは、長い間霧に包まれていた。この様な時代の中で雅無舎は、志賀の都の古史を偲び、長等の山桜を詠んでいる。幾多の古歌を心得た文人ではないかと思う。

菊岡検校(一七九二—一八四七、検校に登官一八〇六)〔註3〕はこの地歌の作曲者で、この地歌に箏の譜を作曲したのは、箏の名手といわれた八重崎検校(一七七六—一八四八)である。

菊岡検校は、京都職屋敷に属する盲人で、この「長等の春」の作曲に当っては、現地を訪れ情感を高められたことであろう。菊岡検校には多くの作品があり、「御山獅子・酒・今小町・磯千鳥・舟の夢・里の春・梅の宿・桂男・楫枕・けしの花・夕顔・園の秋・竹生鳥・茶音頭(作詞横井也有)・ま、の川」等があつて、邦楽演奏会でお馴染の古曲の名曲揃いである。

この地歌に、尺八楽譜が作られたのは、明治維新に普及尺八(虚無僧尺八)禁止令が發布されて以降のことである。

〔註3〕 ここに上げた菊岡検校の「長等の春」以外の作品十五曲は、すべて「新うたのはやし」に収録されている。

三、歌詞に詠まれた名所旧蹟の古事来歴について

(一)「ながらの山のやまぎくら」のこと

長等山というのは、琵琶湖南端の西側にある三五四米の山であるが、独立峰ではなく、琵琶湖が海拔八十五米であ



資1 (大津市地図に加筆した)

るから、大津市の里山の趣がある。同じ様な高さの山並が丘の様に連なるので、長等の名が生まれたという。この東側山腹に、三井寺の多くの堂塔があり、三井寺の山といってもよい。(資1参照)

長等山の山桜は、古くから歌人・風流人に詠まれていることから、よく知られた山桜の名所であったのであろう。

次に、この長等の桜を詠んだ有名な古歌三首を挙げる。

『登蓮法師集』登蓮の家集（平安末期、一一七〇頃）

さくらさくながらのやまにかせふけは

それにも見ゆるしがのうらなみ（三番）

（大意）桜が咲いている長等山に風が吹くと、空に花び

らが舞って、志賀の浦波の様に見える。

『千載和歌集』藤原俊成撰（文治三年、一一八七）

さゝ浪や志賀のみやこはあれにしを

むかしながらの山ざくらかな（六六番）

（大意）志賀の都（大津宮）は荒れてしまっているが、

昔ながら（長等とかけ）の山桜であることよ。

〈註〉詠者はよみ人しらずになっているが、実は平忠度の

の都落ちの時の作。

『林葉和歌集』俊恵の家集（治承二年、一一七八）

さゝ浪やながらの桜開きぬれば

花もしげりな志賀の山越（一六五番）

（大意）長等の桜も咲いてしまった。きつとこの花は、

志賀の山を越えて行ってしまったことであろうよ。

（二）「しがのみやい」のこと

この歌詞の始めの一節は、本稿の要のところである。

この志賀の都とは、三十八代天智天皇が、『日本書紀』の記述では、天智六年（六六七）三月に大和の明日香から遷都されて、翌年一月に晴れて即位された近江宮のことで、大津宮が正式名称である。志賀の名は、万葉集にも見る大津市一帯の古称である。

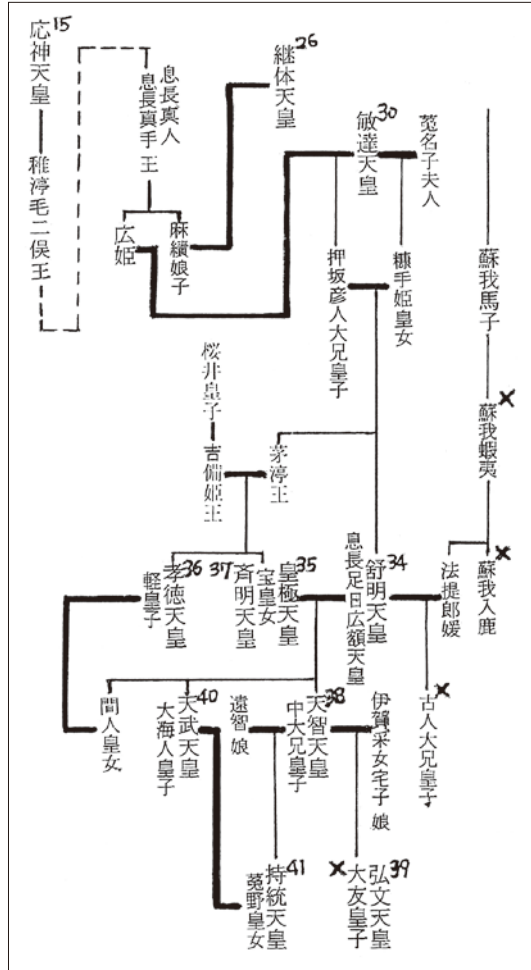
天智天皇は、ここで即位されるまでには、長い間古代史に残る紆余曲折の道を歩まれている。

天皇が、中大兄皇子ナカオノエノミコと違って歴史の舞台に初めて登場されたのは、三十五代皇極天皇四年の乙巳イッペンの変であろう。大極殿で中臣鎌足の力を得て、専横を極めた蘇我入鹿を誅し、蝦夷を自害させて、二十九代欽明天皇以来深く皇統に關わっていた蘇我本宗家を滅亡させ、その影響力を断ち切られた。この後を継がれた三十六代孝徳天皇の時に立太子されて政務を司る中で、蘇我の流れをうけている競合相手の庶兄弟、古人大兄皇子フルヒトオノミコを謀反の廉で肅清されたが、天皇崩御の後にも皇位に就かれることはなく、退位されていた皇極天皇が重祚されて三十七代齊明天皇となり、この天皇が崩御されても、中大兄皇子は称制（即位しないで政務を執ること）されていた。この様な経緯を見ると、中大兄皇子の即位には、余程の制約事情が存在していたと考えざるを得ない。

『大津市史』によると、実に称制六年目の時に行なわれた大津宮遷都について、次の様に記述している。

日本書紀・新撰姓氏録の記述に基づき、本稿の關係分について作成した。
太線は婚姻關係、細線は係累、点線は省略を示す。×は自害・誅殺を示す。

皇統図



資 2

その一、蘇我本宗家が滅亡した後も、なお残る大和豪族との関わりから脱して、天皇親政と大化改新につづく近江令をすゝめるために、新天地を求められた。

その二、天智二年（六六三）に半島の百濟救援のため軍を進めたが、白村江の戦いで、唐・新羅の軍船百七十隻を相手に大敗してしまい、この敵の来寇に備えて、対馬・壹

岐・筑紫に防人と烽（のろし）を置き、さらに長門・筑紫に城を築き防備を固められたが、なお要害の地である大津に遷都する必要があった。

というのである。以上の説はいずれも尤な説であるが、中大兄皇子が大津宮に遷都されるや直ぐ即位されていることから考えて、吃緊の案件解決のための大津遷都であった

ことを私は強調したい。この近江の天津の地は、資2の皇統図に見る様に、天智天皇がその流れをうけた古豪息長の勢力圏に近いという、天皇と中臣鎌足による深謀熟慮の上の遷都であつたと考えている。

では、この息長とは如何なる氏族か。『新撰姓氏録』によると、息長は十五代応神天皇の皇子、稚淳毛二侯王の末裔で、滋賀県坂田郡米原町・近江町一帯に勢力を持った氏族である。息長真手王の娘、麻績姫皇は二十六代継体天皇（福井県坂井郡三国の出身）の、広姫は三十代敏達天皇の妃に入り、三十四代舒明天皇以降の皇統に関わりが深い。息長氏の大和における拠点は、三輪山の南の初瀬川を挟んだ忍坂の地であるが、舒明天皇の和風諡号を息長足日広額といい、またその陵墓（母の糠手姫皇女と合葬）の押坂陵は忍坂の地にあつて、息長との深い連がりを裏付けているのではないかといわれている。この息長は、四十四代天武天皇十三年に制定された八色の姓（真人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置）では、最上位の真人の姓を賜わり、真人姓三十四氏の筆頭に列せられている。

この遷都については『日本書紀』（巻第二十七天智天皇六年三月）に「天下の百姓遷都することを願はずして諷諫むく（遠まわしに諫める）者多く、童謠（諷刺する歌）亦衆し、日々夜々失火の処多し」と記述され、大和の民が望まない大津宮遷都であつたことが分かる。

この様な経緯を経た大津宮であつたが、天智八年十月、重臣中臣鎌足（藤原の姓を賜る）が逝去し、天智十年十二月には天皇崩御された。天皇の子、大友皇子が称制を司る中で、御陵造営のためと称して、美濃・尾張で人夫を集めたことが発端になり、これを拳兵の動きと受けとつた天皇の弟、大海人皇子が隱棲先の吉野で決起し、僅か二ヶ月の戦いで近江朝廷軍を敗り、大友皇子は自決されたという。『日本書紀』に詳述された歴史に残る壬申の乱である。この戦いで大津宮は焼亡し、果かない運命の結末となつた。万葉歌人の柿本人麻呂が、この廢都に立寄つて詠んだ懐旧の歌がある。

過近江荒都一柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次 畝火之山乃 樞原乃 日知之御世從 阿礼座師
神之盡 櫻木乃 弥繼嗣尔 天下 所知食之乎 天尔満
倭乎置而 青丹吉 平山乎超 何方 御念食可 天離
夷者雖有 石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮尔 天下
所知食兼 天皇之 神之御言能 大宮者 此間等雖聞
大殿者 此間等雖云 春草之 茂生有 震立 春日之霧流
百磯城之 大宮處 見者悲毛

（二十九番）

（大意） 畝傍山の傍の橿原の宮で天下を治められた御代から、代々の天皇は大和の国で政をされていた。

天智天皇はどの様にお考えになったのか、この大和を出て奈良山を越え、遠い田舎の地である淡海国の大津の宮がよいところであるとして、そこで政をされた。その大宮はこゝと聞いているが、また大殿はこゝというけれども、春草が生い茂り、霞が立っている大宮の廢墟を見るのは悲しい。

というもので、事変後まだ十数年という生々しい荒都の姿を見ての歌である。

この大津の宮は、廢墟と化して千三百年を経た今、杳としてその遺跡が判らなかつたが、昭和四十九年からの発掘調査によつて、近江神宮の近く、長等山北端に近い錦織住宅街の一角であることが確認されている。ここに至るには、『扶桑略記』^註の天智天皇紀に記述された、次の崇福寺創建に関わる縁起録が示唆になつたという。

天智

六年丁卯春正月。遷^二都近江國志賀郡大津宮^一。本在^二大和國岡本宮^一。二月三日。天皇寢^二大津宮^一。夜半夢見^二法師^一。來云。乾山有^二靈窟^一。宜^二早出見^一。天皇驚寤。出見^二彼方之山^一。火光細昇可^二十餘丈^一。火焰廣照。甚爲^二希有^一。即召^二大伴連櫻井等^一令^レ見。皆奏^二奇異之相^一。明日尋^二求其地^一。天皇行幸。願滿法師等相具。當^二彼火光處^一。有^二小山寺^一。一優婆塞經行念誦。召^レ之借^二問地山之名^一。答云。古仙靈窟伏藏地。佐々名實長等山。于

レ時優婆塞自然失之。罔^レ知^レ所^レ在。但其地躰骨。林樹森々。谷深巖峻。流水清涼。寂寞閑空。可^レ稱^二勝地^一矣。七年戊辰正月十七日。於^二近江國志賀郡^一。建^二崇福寺^一。(以下略) 已上崇福寺緣起

(大意) 天智天皇は、天智六年正月(日本書紀の記述は

三月)、大和の岡本宮から大津宮に遷都された。

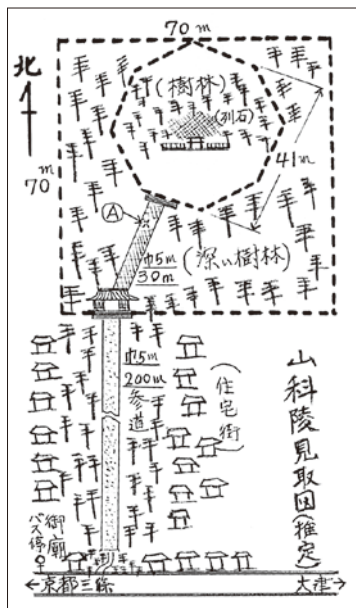
二月三日の夜、天皇は夢に法師が現われて、内裏の乾(北西)方向の山に靈窟がある、急ぎ見る様に示唆され、驚いて寤(原文の寤は竈の意であるが、寤の異体字とみた)られた。早速外に出て彼方の山を見ると、火光が細く十余丈も立昇り、広く照らしていた。この珍しい出来事に、天皇は大伴連桜井等を召されたが、一同不思議なことと申した。夜が明けるや、天皇は願滿法師が同行して、火光の昇っていた所に行かれると小山寺があつて、一人の法師が念誦行化していて、天皇がこの山の地名を問われると、ささなみの長等山と答えるや、何処とも知れず消え失せ、後には骨が残されていた。天皇は、翌天智七年正月十七日、この深山幽谷の地に、崇福寺を創建されたという。

昭和十三年から、廢寺となつている崇福寺遺跡の考古学的調査が行なわれ、比叡山東南山腹の地であることが確認され、この後の大津宮遺跡探査に有力な手懸りとなつた。

正に崇福寺は、大津宮の乾の方角に二軒を距てて相對していたのである。

大津市埋蔵文化財調査センターの資料によると、大津宮は礎石や瓦を用いない古代建築様式であったので、遺物がなく、柱穴によって宮殿その他の建物の規模が推定されている。これによると、内裏は南門から北辺まで、南北二百四十米の規模をもつ宮であった。当時の琵琶湖岸は、低湿地帯が内陸深く入り込んでいた様で、大津宮は水陸交通の要衝の地には在ったが、狹隘な都であったという。(資料1参照)このためか、天智九年二月に、天皇が蒲生郡置造野(現在の蒲生町、日野町の地―大津宮の東方六十軒)へ宮地の視察に行幸されたと『日本書紀』に記述されている。広大な新宮都建設の構想があったのであろう。

天智天皇の御陵(山科陵)は、大津宮の南西へ五軒程離れた京都市山科区御廟野町地内にある。この地は、比叡山系の山並の南端域に当り、天皇が山科野に葉胤に行幸されたと、『日本書紀』に記述がある由縁の地でもある。御陵を訪ねて、街道沿いの遊園地の様な緑地から入り、樹林によって周辺の住宅街と隔離された、格調の高い、そしてよく整備されている参道を進む。御廟門を通り、深い樹林で薄暗い参道を登りつめたところが墓前である。『歴史考古学大辞典』の天皇陵古墳調査記録によると、墳形は対辺四十一米の八角形で、最下段は辺長七十米の方形という。



資3



資4

資3は、この記録を基に、私が訪ねた結果を総合して、検討を重ねて作成した山科陵の見取図で、資4の写真は、(A)の地点から撮影した墓前の全景である。

飛鳥時代の天皇で、この八角形墳墓の始まりは舒明天皇(合葬)で、

斉明（合葬）、天智、天武と持統（合葬）が何れもこの形態であつて、八角形には重大な意味があるという。

古代中国で生まれた道教は、天空を東西南北を基準に正八角形で表現し、その中央に位置する不動の北辰（北極星）を神秘化し、天皇大帝と称して崇拜した。この思想がこの時代に日本に伝わり、天皇の称号や、八角形の高御座が生まれて玉座になり、天皇の墳墓の形状にも、八角形が取り入れられたという興味深い説である。このことから、天皇の称号の始まりは、平成十年に飛鳥池遺跡から出土した木簡で既に明らかになっている天武天皇から、天智天皇、さらに舒明天皇にまで逆上るのではないかといわれるのである。

壬申の乱で敗死された大友皇子は、明治十年に三十九代弘文天皇として皇統に列せられ^{註6}、大津市役所背後の長等山麓にあつた皇子の墳墓が整備されて、長等山前陵になつている。（資1参照）

〔註4〕平成二十七年一月十六日の朝刊の一面に「一辺五十米の巨大方墳、七世紀の舒明天皇陵か」と報じられた。これは舒明天皇十三年十月（六四一）に天皇崩御され、翌皇極元年十二月に滑谷岡（所在不明確）に葬られたと、日本書紀に記述されている陵墓ではないかというのである。先に記述した忍坂の押坂陵（八角墳）は、皇極二年九月に改葬したとされているものである。

〔註5〕『扶桑略記』—比叡山の僧、阿闍梨（軌範師）皇圓が六国

史（日本書紀・続日本紀・日本後紀・続日本後紀・文徳実録・三代実録）以下の古史（神武天皇から七十三代堀河天皇まで）や僧伝・縁起・流記（寺院関係の宝物・所領記）を編年体に取り捨選択してまとめたものであるが、三十巻の大半が缺失し、十六巻が残存する。

〔註6〕天智天皇崩御され、壬申元年における大友皇子の称制を日本書紀では認めず、天武天皇紀としている。江戸期に興隆した国学では、大義名分論に基づきこれを正統化している。本居宣長の門流を継いだ若狭藩士の伴信友（一七七三—一八四六）は、その著『長等の山風』の中で、大友皇子が正式に即位したと論証し、大友天皇の名で論述している。

（三）「三井てら（寺）」と「たかぐわんおん（高観音）」のこと
私達に馴染み深い三井寺の名は通称で、正式には長等山園城寺と称する天台寺門宗^{註7}の総本山である。境内に、天智・天武・持統天皇の産湯に使われたという霊泉があることから、御井の寺と呼ばれ、三井寺の名で汎く知られて、寺発行のガイド冊子も「三井寺」としている。（資1参照）

この三井寺は、天智・弘文（大友皇子）・天武三帝の勅願寺である。大友皇子の子の与多王が私有の莊園・城邑を献上して、天武十五年（六八六）に長等山東側山麓に建立したとされていて、園城寺の名称はここから付けられたという。この草創に関わる縁起について、大正十五年の金堂修理の時に、周辺の発掘調査が行なわれ、創建当時の瓦が出土したことから、考古学的にも裏付けられたという。

この大友与多王草創の氏寺から、東大寺・興福寺・延暦寺に比肩される大寺に興隆したのは、延暦寺の僧円珍（八一四―八九一）の力によるという。円珍の没後に天台宗は、延暦寺の山門派と三井寺の寺門派に分れて激しい抗争が繰り返され、これが延々と戦国時代まで続いたが、元龜二年（一五七一）湖南の一揆衆を制圧した織田信長と延暦寺が対立し、全山焼討ちされてしまったことを機に、両者の抗争は終焉している。この間の抗争で、三井寺は十数度に及ぶ焼討ちに遭っているが、その都度再建されて来た。現在の山容は、慶長年間（一五九六―一六一四）の豊臣・徳川・毛利などの大大名の支援により復興された以降のものという。

三井寺は、三十五万坪を超える広大な寺域で、ここにある多くの堂宇は北院、金堂・三重塔・三井の晩鐘で名高い鐘楼・そして「御井の霊泉」の関伽井屋がある中院と南院の三院に構成され、この他に五別所（別院のこと）がある。高観音は、五別所の一つ、近松寺のことで南院にある。この近松寺は、創建が延喜四年（九〇四）で、五別所の中で最も古い。現在の本堂は、享保元年（一七一六）の再建によるものである。本尊が十一面観世音菩薩であって、近江西国第四番に列せられていることから訪れる信者が多く、また長等公園の長等山中腹にあつて、周辺は桜の名所でもあり、「高い所にある観音さま」を意味する「高観音」。

「高観音近松寺」の名で、汎く親しまれてきたという。（資5）（資1参照）

江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎脚本家の近松門左衛門は、この寺で佛典を学び、近松の名はこの寺の名に由来するという。

平成の今、私が高観音前庭の道に立ち、路肩に植えられた桜の木の間から東方遙かを眺めた時、眼下の琵琶湖畔にはビルが林立していて湖面は殆ど隠され、六月・十一月に訪れた何れも空が靄っていて三上山の眺望が効かず、この歌詞に詠まれた往時の景観は望むべくもない。しかし、地歌「長等の春」に魅せられた人達がここを訪れて、演奏を楽しんでいくという。雅の世界は、また別なのかも知れない。

（註7） 旧来、園城寺は天台宗寺門派と称していた。昭和二十一年、独立した戒壇であることを明確にするため、天台寺門宗と改称している。

（四）「みかみ（三上山）」のこと

この三上山は、高観音の正面、東方向に巾五杆に狭まっ



資5

た琵琶湖を越え、遙か二十軒離れた湖東平野にある標高四三二米の秀麗な山で、近江富士の別名がある。資6は、三上山の西一軒の地点から眺めた写真で、高観音からの遠望もこの山谷である。



資6

皇の記述に、天皇の三男、日子坐王^{ヒコイマス}が御上神社^{ミカミ}の巫女^{ミコ}、息長水依比売^{オシナギヨリヒメ}を娶るとあるので、近くの豪族息長との関わりがあるのかも知れない。

三上山伝説に、この山を七巻半まく大百足^{ムカデ}退治の俵藤太(藤原秀郷) 武勇伝物語がある。

この山は由緒によると、七代孝靈天皇六年(前二八五)に、天之御影神^{アメノミカゲノカミ}

(天照大神の御孫)が三上山に降臨されたと伝え、山上には巨石の磐座^{イハクワ}

があるという。その後、藤原不比等が養老二年(七一八)に勅命を受けて、三上山の西側山麓に御上神社^{ミカミ}を造営し、三上山はその神体山である。

『古事記』の九代開化天皇^{ヒコイマス}が御上神社^{ミカミ}の巫女^{ミコ}、息

長水依比売^{オシナギヨリヒメ}を娶るとあるので、近くの豪族息長との関わりがあるのかも知れない。

三上山伝説に、この山を七巻半まく大百足^{ムカデ}退治の俵藤太(藤原秀郷) 武勇伝物語がある。

(五) 最後に「におのうみ(鳩の海)」のこと

鳩の海とは、古くからの琵琶湖の呼称であった。昔の琵琶湖は水位が安定せず、湖岸は湿潤地帯が広がっていたといわれ、葦や水草が茂って、かいつぶり(鳩位の大きさで暗色の水鳥、鳩はその古名)が多く生息し、身近な鳥であったことからこの名が生まれたのであろう。

明治時代の後期に、湖水が流れ出る南端の瀬田川に、洗堰が建設されてからは、水位が安定し、湖岸も整備されて、往時に見られた様な自然の環境ではなくなっている。

昭和四十年、このかいつぶりは滋賀県の「県の鳥」に指定され、また図案化されて「コミュニケーション」マークに使われ脚光を浴びている。

大津市歴史博物館で教えられた刊行書『琵琶湖―その呼称の由来』によると、この鳩の海の呼称は次の歌に見られ、その時代頃からのものではないかという。

『源氏物語』(平安中期、一〇〇〇頃)

しなてるやにほの湖に漕ぐ舟の

まほならねどもあひ見しものを(「早麻」の巻)

『千載和歌集』(一一八七) 上西門院兵衛作

我袖の涙や鳩の海ならむ

かりにも人を見るめなければ(八五五番)

『新古今和歌集』(一二〇五) 藤原家隆作

にほのうみや月の光のうつろへば

浪の花にも秋はみえけり (三八九番)

本題の地歌「長等の春」作詞の雅無舎は、次の作品にも
鳩を歌詞の中に歌いこんでいる。湖南の人であるだけに、
身近な歌材であったのであろう。

地歌「朝づまふね」鳩とりのうきねにぬらすそでさへ……
地歌「四季近江八景」……ながらの夕がすみ山おくふかき
かねの音も鳩のうみづらすみわたる……

では、最古と思われる呼称は、『古事記』、『日本書紀』、『万
葉集』に多く見られる淡海である。これは塩水ではなく、
淡水の大きな海を意味して生まれたものであろう。

(古事記) 淡海・近淡海 (浜名湖は遠淡海) の記名が多く
ある。

(日本書紀) 淡海・淡海の海、そして天智天皇紀に初めて
近江の記名が見られる。

(万葉集) 近江・淡海の呼称で詠まれている。

初めて琵琶湖の呼称が文献に出現したのははずと新し
く、室町後期 (十六世紀の始)、京都五山の詩僧景徐周麟
の「湖上八景」の詩にその名があるという。

江戸期に入ると、一挙に琵琶湖の名が見られる様になり、
江戸中期には固有名詞として定着し、伊能忠敬の「琵琶湖
近傍大絵図」によって、全国的に決定付けられたという。
この名は、湖の形状が楽器の琵琶に似ていることから生ま
れたのであるが、近江松本村 (大津市) の地誌『淡海録』(元

禄二年、一六八九) では、「湖水を琵琶湖と名付くは、竹
生島の天女音楽を好み給ふ故に、琵琶湖と名づく……」と
説き、琵琶を抱く弁財天を尊崇して呼称する様になったの
だという。

琵琶湖は列島の中央に位置していて、古代から政治・経
済・文化・交通の要衝にあつたので、その呼称も時代を反
映して、この様に多彩な変遷があつたのだと思う。

四、むずび

地歌「長等の春」に詠われている事蹟には、それぞれに
奥深い歴史・変遷があつた。中でも歌詞の冒頭に詠われた
志賀の都の果かない運命には感慨を覚える。ましてや、壬
申の乱後の間もない時期に、無残な姿を見せる廢都を訪ね
て、万葉歌人の柿本人麻呂や高市古人が「……見るも悲し……」
と詠んでいるが、その傷心の思いは如何ばかりかと思ひ知
らされる。

この琵琶湖周辺の地は、古墳や遺跡が多く存在している。
三上山の北に隣する大岩山の古墳群や、そこで明治・昭和
の時代に、日本最大の銅鐸 (高さ一三四・七センチ、重さ
四五・四七キログラム) を始め、大小二十四個の銅鐸が発
見・発掘されたことは驚きである。古代の日本を語る時に
は、欠かせない地域であらう。

〔後記〕本稿の執筆を思い立った当初、道路地図・全国地図には表示されていない様な長等山・大津宮の調査に就て、大津市歴史博物館長樋爪修様から適切なご教示をいただき、厚く御礼を申し上げます。高観音の探訪をと訪れた三井寺事務所では、応接して下さったのが執事長福家俊彦様でしたが、このお方が何と高観音近松寺住職様であったとは、奇縁・奇遇、これに過ぐるものはなく、感激一杯でした。ほんとうにお世話になりました。また、大津市埋蔵文化財調査センター、銅鐸博物館、そして京都府立総合資料館、名古屋市鶴舞中央図書館の司書の諸先生には、数々の御指導をいただき、有難く感謝致しております。

中日新聞の毎週金曜日「文化欄」に連載の、奈良県立図書館情報館長千田稔様執筆の「古代史の舞台―飛鳥を歩く」の記事からは、示唆に富む知識を得ることが出来、本稿にも反映させていただきましたことを申し添えます。

〔参考文献・刊行書〕

- 新うたのはやし 橋萬丸著 明治三年 林芳兵衛出版
 古事記 日本古典文学全集 一九九七年 小学館
 日本書紀(1-3) 新編日本古典文学全集 一九九四-八年 小学館
 皇室事典 皇室事典編集委員会 平成二十一年 角川学芸出版
 萬葉集新釋 豊田八十代 大正十四年 広文堂
 萬葉集 新日本古典文学大系 一九九九年 岩波書店

- 千載和歌集 新日本古典文学大系 一九九三年 岩波書店
 新古今和歌集 新日本古典文学大系 一九九二年 岩波書店
 新編国歌大観 角川書店
 源氏物語 新編日本古典文学全集 一九九七年 小学館
 大津市史 昭和十七年 大津市役所
 新撰姓氏録の研究 佐伯有清 昭和五十六年 吉川弘文館
 扶桑略記 国史大系(十二) 二〇〇三年 吉川弘文館
 道教思想史研究 福永光司 一九八七年 岩波書店
 長等の山風 日本思想大系 伴信友 岩波書店
 琵琶湖―その呼称と由来 木村至宏 一九八七年 岩波書店
 近江の伝説 渡辺守順 昭和四十九年 大日本法令印刷
 滋賀県の地名 日本歴史地名大系 平凡社
 歴史考古学大辞典 二〇〇七年 吉川弘文館
 日本国史大辞典 吉川弘文館
 角川日本地名大辞典(滋賀県) 角川書店
 三井寺(小冊誌) 三井寺
 いにしえの近江大発見(小冊誌) 滋賀県教育委員会
 御上神社由緒略記(小冊誌) 御上神社
 大岩山古墳群(資料) 野洲市教育委員会
 大津京と寺院(資料) 大津市埋蔵文化調査センター
 (みやかわ たけじ)